

『一年前はあんなに
お元気だったのに』

浅野 正士

八月一五日の聖母の被昇天の日にアスキュー神父様が帰天なされたとお聞きしたときは、「まさか！1年前お会いした時はあんなにお元気だったのに」というのが正直な思いでした。

昨年八月にオーストラリアのブリスベン郊外に住む姉宅に行った折、アスキュー神父様がお住まいになっていたトゥーンバまで足を伸ばし、お会いしてきたことは二〇〇四年十月号の「みこころ・ねつと」に訪問記として掲載して戴きました。内容がダブルかも知れませんが思い出話として再度記させていただきます。

昨年お会いする前は、城北橋教会の五十周年にご出席された帰国時の飛行機のなかで倒れた後、奇跡的に回復され彼の地で療養されているとはお聞きしていましたが、どのような様子で生活していらっしゃるのかは解りませんでした。



ひよつとしたら車椅子を利用されているのか、それとも杖を使われているのか、後遺症はお残りにならなかったのか・・・などと考えるながら聖心布教会が運営しているトゥーンバにあるハイスクール・ダウンランドカレッジの受付で待っていたのですが、我々のまえに現れた神父様は杖もつかず、歩き方も全く普通で一年前に飛行機の中で意識を失い倒れたことなど少しも感じさせないほどお元気な様子でした。

アスキュー神父様は自ら花と大きな木々と緑の芝に囲まれた美しい

ハイスクールの中を案内してくださり、同じ敷地内にある司祭館の建物の由来や、その前に聳えている大木がPine（松の木）の一種であること、その木は司祭館が出来るずっと前からここにあったこと、ハイスクールの学生は牧場や農業を職業としている親が多いことなど散歩しながらいろいろなお話をして下さいました。

日本の話になり城北橋教会の皆さんの写真をお渡しし、城北橋ではミサ後にアスキュー神父様の病氣回復のお祈りを毎回していることをお伝えすると懐かしそうに「それは有難う、皆さんもお元気な様子ですね、私もこのように元気になりました、皆さんによろしく伝えてください」とおっしゃいました。

帰国した後、訪問時の写真をお送りしたところ、しばらくしてから英語で書かれたご返事のお手紙をいただき、「この英語の手紙をあなたが読解できることを望みます、もし解らなければ牧野神父様に訳してもらいなさい」という親切なアドバイスと最後に「Thank

you for your visit for the photos. God bless both you and your family, Fr. J. Askew M.S.C.」と記されていたことも感激しました。

あまり熱心な信者と言えない私は城北橋教会主任司祭時代のアスキュー神父様は厳格な感じですが少し近寄りやすい印象を抱いていました。オーストラリアでお会いしたアスキュー神父様はそのようなことは少しもなく気さくにお話ができ、今もその時のお姿が昨日のように目に浮かぶのです。

